

美術作家・むらたちひろ(1986年・京都生まれ)は、「染色」への探究心を始点に、「染める／染まる」という行為・現象に着目した作品制作に取り組んでいます。これまでもロウケツ染や型染を応用した独自技法により、一度染めあげた図像を水で滲ませることで日々移り変わる心象風景を描いた絵画作品を発表してきたむらたは、近年になってこれまで以上に広く、あるいは深く「染色」へと眼差しを向け、積極的な作品展開に取り組んでいます。今展タイトルにもある【internal works】とは、「染める／染まる」を物理的な側面だけでなく、精神的な現象・行為とも解釈し、「本質的な・内在的な・体内の」というニュアンスを含む【internal】という語を合わせた造語であり、これは近年のむらたの興味と視点を表す語であるといえます。

染色は染料や繊維、粒子、引力などの物質や科学に拠る現象であり、「染める／染まる」はいわば自然で、当たり前とも言える現象です。そして染色は長い歴史の試行錯誤から、そこに「染めない技術・定着させる技術」を立てることによって、染色を行為へと昇華させたものと言えます。

むらたは自身の染色から、一旦はこの技術を遠ざけることで「そこで何が起きているのか」を見つめ直し、再び「染」を捉えようとしていると思えます。そして「染める／染まる」は私たちの心や精神の内に、あるいは現在の世界の様相にも見ることが出来る現象・行為であるとして、染色を物質的、精神的な側面から、あるいはミクロとマクロの視点によって捉え、解釈することで、その多様な重なり「内と外」に作品を成そうとしています。

むらたのこうした眼差しは、近年の発表作品から知ることができます。2017年の「internal works / 水面にしみる舟底」展(ギャラリー揺 / 京都)では、本展3階展示作品《 thickness of time #02 》などに見られる、デジタル写真を染料によってインクジェットプリントした布に裏面から水を与え、「むこう」にあるイメージを「こちら」に引き寄せる、あるいは往来させるかのような作品を発表しています。本作では絵画

が支持体の「上(こちら)に向かって」レイヤーの構造を持つのに対し、布という物質として表裏を持ちながらも、染料が染み入ることで「布(あるいは色)そのもの」となることでレイヤーが統合される染色の特徴を活かし、私たちの記憶や認識の揺らぎを染色という現象、表裏あるいは同一という関係に置換してみせた作品と言えます。

2018年の「internal works / 満ちひきは絶え間なく」展(ギャラリー恵風 / 京都)では、染料が繊維の毛細管現象によって染み上がるなかで、多様な色の波紋があらわれる様によって、単一と思われた色に多様な「色」が含まれていたことを明らかにし、私たちが「ひとつ」とすることで見落としている「多様性」という存在を表出させています。

また、同一の現象を用いた作品である、本展4階展示作品《 planet 》は、布を折り紙の二艘船の形に折り、染料・水に浸けることで次第に多様な色が現れる様子をインターバル撮影による映像作品として展開した作品であり、「染める／染まる」の結果である染色が持つ、不可視のプロセス(時間)そのものまでをも作品へと展開しています。

2017年の「未来の途中プロジェクト 未来の途中の、途中の部分」(京都市立芸術大学Gallery @KCUA) 出品作品であり、本展4階展示作品《 境界 borders / boundaries 》は、いくつかの極から異なる色が滲み、ぶつかり、互いに染め合い、いつしか境界線の消失した曖昧な色面を布に留める作品です。現れた「むこう」と「こちら」という『境界』を持ちながらも曖昧に混じり合い、混じり合いながらも決してひとつになることはない様相には、染色という行為・現象の持つ美しさ、「染める／染まる」が持つ強さや弱さを見ることが出来るが、むらたはここに「旗」のイメージを重ねることで、その様相を「個 | 集団」、「過去 | 未来」、「善 | 悪」、「生 | 死」といった、極に固定化して捉える私たちの世界もまた、揺らぎ・震える豊かな曖昧さの中に在ることや、染める／染まるという行為・現象の中にあることをイメージさせます。

本展「internal works / 境界の渉り」は、むらたの「染色」への多様な眼差しのひとつの合流点として、再びこの「境界」に焦点を合わせて構成されます。しかし、ここでは「境界」は、色と色の滲みやせめぎ合いに置換された「線や図」を布に描き示すことだけではなく、また「むこう／こちら」を表裏に置き換えたデジタル写真による作品や、平面上の極に置き換えた作品に見られる、構造を「眺める」視点からのものではなく、自身と世界を含んで揺らぐ「境界そのもの」を感じ、そのただ中に漂う「私」という存在を確認しようとしているかのようです。

新作となる本展2階展示作品《 ひろがるまる 》は、糊によって防染した布に染料を置き、その滲みが抵抗を受けて一度止まり、そこに境界線を引こうとしながらも、布の内を進んで再び拡がる様相により、「境界で起きていること」を描き出したものです。また3階のインスタレーション作品《 ここからむこう 》はこれらと対比的に、ギャラリーの特徴的な窓面を色面で満たし、それらを塗料で埋めることで、確かに存在しているにもかかわらず、触れることのできない「むこう」を体感させるものです。

むらたの「染」は、私(内)と世界(外)に在る目に見えない「染める／染まる」の現象・行為に色を与え、その存在やベクトルをあらわにすることであると思えます。そうして鑑賞者は作品に目を凝らし、眺め、思うことで「ここ(私と世界)で何が起きているのか」へと視点を移すとともに、いつしか内も外も、表も裏もない「境界」のただ中に漂う視点へと導かれるのではないのでしょうか。

また、私たちの『見る』が、「むこう」と「こちら」をマクロに眺める視点に重なり、あるいはミクロに往き来する染料の「眼差し」を体験できることは、「染める／染まる」[うつす／うつされる][地／図]などの関係が『分かたれながらもひとつとなっている』染色だからこそ可能なものなのではないのでしょうか。

正木裕介(Gallery PARC)

境界の渉り

i n t e r n a l w o r k s

むらたちひろ

## statement

水が繊維に浸透することで像が現れ  
やがて水は消え  
色だけが残る  
この現象が私たちの記憶や精神にも  
起きていることを想像し  
わたしは「染める」をおこなう

「染まる」現象そのものを主題化して「染める」をおこなう作品を [internal works] としています。  
刷毛で直接触れた部分よりも深く広く色が浸透していく。その現象に記憶や精神の機微を重ね、【本質的な・内在的な・体内】を意味する語を用いて [internal works] という造語で表しました。

本展では「染めない・染まらない」に注視した作品により、[internal works] による「境界」をえがきます。

浸透・干渉・侵入・受容・防御・抵抗・越境  
《ひろがるまる》では、これらの事象が支持体である布の内部で起こっていることを、染料によって可視化している。

3階のインスタレーション《ここからむこう》。窓を埋める白い塗膜の奥には、9色で構成した色面が在る。外光の透過によりその存在を感じることはできるが、しかし「むこう」には決して触れることはできない。

## works

### [2F]

**01** ひろがるまる #01~#08  
2018年 240×240mm(#03, #04, #08)、318×410mm  
(#01, #07)、410×410mm(#02, #05, #06)  
綿布・染料・木製パネル

**09** nothing  
2017年 1000×1500×100mm 綿布・染料・木製枠

### [3F]

**10** thickness of time #02  
2017年 606×455mm  
綿布・染料・インクジェット捺染応用技法・木製パネル

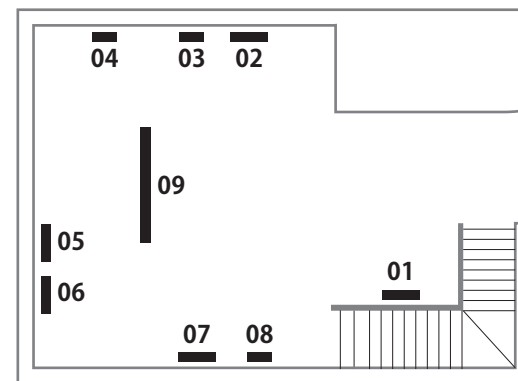
**11** ここからむこう  
2018年 1540×8700mm : 1940×5700mm  
アクリル絵具・アクリルメディウム・木工用ボンド・水性ペンキ・モデリングペースト

### [4F]

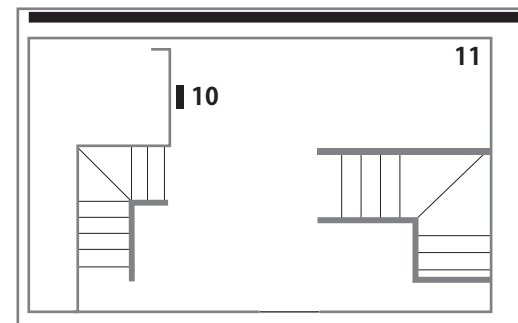
**12** 境界 borders / boundaries  
2017年 各1500×1000mm  
綿布・染料・ハトメ・ロウ防染・型糊防染 他

**13** planet 04C 0200 '18, 2.18 AM9.45 2.19 AM9.21  
2018年  
綿布・染料 / HD VIDEO(6:25)

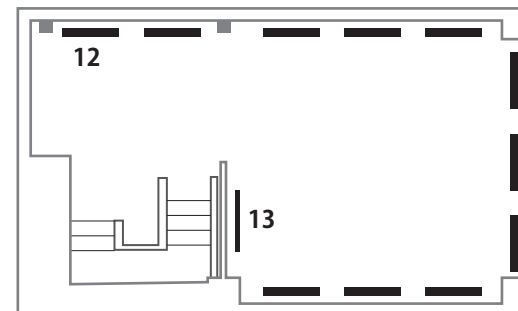
### [2F]



### [3F]



### [4F]



C.V.

## むらたちひろ

<http://murata-chihiro.tumblr.com>

1986年、京都生まれ  
2011年、京都市立芸術大学大学院美術研究科工芸専攻修士課程修了

### | 個展 |

- 2018 Internal works / 満ちひきは絶え間なく (ギャラリー恵風 / 京都)
- 2017 Internal works / 水面にしみる舟底 (ギャラリー揺 / 京都)
- 2014 時を泳ぐ人 (Gallery PARC / 京都)
- 2012 水たまりアルバム (Gallery Ort Project / 京都)

### | グループ展 |

- 2018 藤原隆男 京都市立芸術大学退任記念展「ほしをみるひと」 (京都市立芸術大学Gallery @KCUA)
  - PHO-TEX (GALLERY GALLERY / 京都)
- 2017 未来の途中プロジェクト その後の、未来の途中 (京都工芸繊維大学美術工芸資料館)
  - 未来の途中プロジェクト 未来の途中の、途中の部分 (京都市立芸術大学Gallery @KCUA)
- 2016 未来の途中のリズム (京都工芸繊維大学美術工芸資料館)
  - ARTIST WORKSHOP@KCUA 成果発表展 ネリー・ソニエ「FEATHER」 (京都市立芸術大学Gallery @KCUA)
  - 琳派400年記念 新鋭選抜展 -琳派FOREVER- (京都府京都文化博物館)
  - 新鋭染色作家選抜12人展 -染めに拓く- (染・清流館 / 京都)
- 2015 第20回 染・清流展 (染・清流館)
  - Contemporary NOREN (京都芸術センター)
- 2014 THE GIFT BOXアーティストが提案する特別なギフト。 (京都府京都文化博物館 別館ホール)
  - Kyoto Current 2014 (京都市美術館別館)
- 2013 染+ ーわたしにまつわるそめのはなしー (染・清流館)
  - 第19回 染・清流展 (染・清流館)
- | 受賞 |
- 2011 京都市立芸術大学制作展, 奨励賞
- 2009 京都市立芸術大学制作展, 同窓会賞